◆ 技術／移民と歴史

アメリカのワシントン DC 郊外にあるスミソニアン協会・航空宇宙博物館（別館）は、航空機や宇宙船の展示に特化した博物館である。この別館はワシントン DC 中心部にある本館よりも敷地が広く、広島に原爆を落とした B-29「エノラ・ゲイ」も展示してあるので、こちらの方が日本人にとっては有名かもしれない。

ここでは、歴史は端的に「モノ」で示されている。例えば、スペースシャトル・ディスカバリー号に残された無数の焦げ跡は、私たちの地球が分厚い大気に覆われていて、それによって生命が育まれた一方、このような宇宙船が地球の外に出て戻ってくるのにその大気がどれだけ大きな障害となっているかを教えてくれる。何かの可能性が同時に制約の条件でもあるという分かりやすい例だろう。それに挑み、超えようという意志は、確かにかつてのアメリカのナショナリズムであったものだ。

技術史とは、良かれ悪しかれ、人がその時代時代で「人であること」の限界を超えてあろうとしてきた意志の表れである。そして「航空・宇宙」に特化したこの博物館で示されているのは、そういう技術の歴史がもたらす「わかりやすさ」である。とても感動的な気分に浸ることができる。

ただ、その「わかりやすさ」は一方で、私たちの社会意識を作り上げる多様な思想や議論、あるいは人種やジェンダーや社会階層といった、人々のさまざまな営みや社会構造を塗りつぶしてゆく作用も持っている。技術がすべての歴史の動きを決めてしまうという説明の仕方は技術決定論といって、地理学でいう環境決定論と同じく相当に乱暴な議論である。多文化共生を謳うアメリカ社会とこれはどう両立するのだろうか。

一方、本館のある DC 中心部に行き、さらに国会議事堂やホワイトハウスから建国以来の戦争慰霊碑、リンカーン記念館やルーズベルト記念碑、戦没者の眠るアーリントン墓地といった一帯を歩いてみれば、本当に今更ながら、アメリカの歴史は戦争でできていることを体感できる。日本でいえば、永田町に靖国神社と千鳥ヶ淵戦没者霊園があるようなものだ。

そしてその傍らにあるアメリカ歴史博物館でも、この国の「戦争の歴史」に相当のスペースがさかれている。戦争の歴史とこの国の発展を展示するコーナー全体のタイトルは「Price of Freedom」。なかでも重要なのは、独立戦争と南北戦争だ。

それにしても「独立戦争」とは、奇妙なものいいである。戦争の結果、独立が成功し双方が国家となったために「戦争」と呼べるわけで、独立を希望する側が敗北しそれが失敗していれば、それは「内戦」や「乱」と呼ばれていたはずだろう。

そういう意味で、「南北戦争（Civil War）」はまさに「内戦」である。激しい戦闘を経て南部側は敗北し、その独立の試みは失敗した。つまり二つの戦争は意味論的には一続きのものなのである。二つの戦争はともに内戦／独立戦争として始まり、一つは独立を成功させ、一つは独立の動きを制圧した。二つの戦争によって、アメリカという国はその輪郭を

整えることができた。そうしたことが、強烈に印象づけられるのがアメリカの歴史である。戦争の発端、格調高く書かれた戦いの目的の宣言や慰霊の言葉、将軍たちの活躍や戦機の決定的な瞬間や、多くの人々がその運命を左右されたことなど、まさにそれはアメリカの「神話」でもあるだろう。（一方、日本の場合、「関ヶ原の戦い」は国の輪郭を決めるものだったようにはみえないし、戊辰戦争はそれに近いはずだが、日本の歴史教育はその詳細を教えない。あるいは、古代までさかのぼり、「白村江の戦い」と「壬申の乱」のセットがそれにあたるだろうか。むしろ現在われわれがはっきり共有しているのは「アジア太平洋戦争（の敗戦）が戦後日本を作った」という認識である）

このように、DC 中心部の一帯に鎮座する「戦争の記憶」なのだが、端のほうにはアメリカ･インディアン博物館やホロコースト記念博物館もあり、植民・開拓時代の交渉やナチスドイツの歴史的犯罪によるユダヤ人の迫害を伝えている。もちろんこれらもまた、アメリカの歴史を彩るものなのだろう。ただ一方で、この一帯には（キング牧師の記念碑を除き）、アフリカ系アメリカ人（つまり黒人）の居場所があまりない。建国の歴史は「白人」だらけだ。歴史博物館のなかには、彼らの歴史と文化を展示する区画もあるのだが、ポピュラー文化のエネルギッシュな担い手としての位置づけばかりが強調され、むしろ懐古趣味のなかに位置づけられてしまっている。

DC 中心部における「記憶」のこうした基本構成は、計画都市ワシントン DC が設計され発展した 18 世紀末〜19 世紀のアメリカの社会構成に基づいているのだろうが､移民が溢れ､自由の条件としての多様性を尊重する現在のアメリカにどうもそぐわないようにみえる。移民が増えてきたとき、社会的にみて、歴史の認識の仕方に変化は起こらないのだろうか？

妻がちょうど現代のアフリカからの移民についての調査をしているので、ついでに聞いてもらった。「アメリカの（白人ばっかりが活躍する）建国の歴史についてどう思う？」と。建国の歴史の誇示は、移民が増えたこの社会で、むしろその凝集力を損なわせるのではないかと心配したのである。「歴史」は既に一種の懐古趣味に属するもの、あるいは各種マニアのデータベースとなっているのではないかという疑念が底にあった。

ただ、その答えはとてもシンプルだった。ある相手はひとこと、「移民が創った」と言ったそうである。

なるほどアメリカの建国から発展の歴史が「白人」ばかりであるとしても、彼らも移民であるという意味では自分たちと同類である。

考えてみれば、アメリカの宇宙開発も、ナチスを逃れたユダヤ人移民を抜きにしては語れない。技術史の「わかりやすさ」と移民のもたらす多様性とは、ともに自由に基礎づけられている。ここでは歴史とは特定の誰かのものではなく、自由が可能にする、何かをなそうとする意志の蓄積として記述される。すくなくとも建前ではそうなっている。そういう意味でも、全くもってうまく設計されている社会だと思う。